序章・バトルスピリッツ ―粉砕激打カイ―

コズミック仮面３

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
序章・バトルスピリッツ　―粉砕激打カイ―

【Ｎコード】
Ｎ６３１４Ｙ

【作者名】
コズミック仮面３

【あらすじ】
どこにでもいるカードゲーム好きの少年、清水カイ。ある日自宅に自分宛てに届いていた、青属性のシンボルを模した石がついたネックレスを身につけた時、彼のバトスピ人生が大きく変わる事になる。目が覚めれば、そこは謎の荒野！？　合言葉は、ゲートオープン！　界放！！　※これは３話の短期連載の予定です。もしかしたら連載になるかも？

『Ｎｏ．１強暴竜ディラノ・レックス。粉砕×激突そして超覚醒！』（前書き）

どもども、バトスピ初心者仮面３です。アイ・ラブ、リブラ・ゴレムとキンタローグ・ベアー！！

というわけで、初心者のくせにバトスピ作品作っちゃいました。効果やルールを間違える時があるでしょうが、その時はお手数ですがご指摘の方を宜しく御願いします！

『Ｎｏ．１強暴竜ディラノ・レックス。粉砕×激突そして超覚醒！』

バトルスピリッツ――。それは現在大人気のトレーディングカードゲームの一つである。他のトレーディングカードゲームでいうモンスターをスピリットと呼び、スピリット召喚にはコアと呼ばれる透明度がある青い物体が必要になる。コアはスピリット召喚の他にもマジックやネクサスという種類のカードにも、必要になるのだ。戦略は勿論、コアの扱い方がゲームの勝敗を左右すると言っても過言ではない。更にバトルスピリッツにはユニークな効果が多数ある。可能ならば必ず攻撃をブロックしなければならない【激突】、攻撃時にスピリットのレベルにあわせて相手のデッキを上から破棄させる【粉砕】。まだまだある。大人気のバトルスピリッツはアニメ化は勿論、ゲーム、漫画、スピリットのフィギュア化等様々なメディアミックスもはたしている。

しかしこのバトルスピリッツ、存在するのはこの世界だけではない。他の世界にも存在しているのだ。その世界の名は、異界『トルソード』。人間は勿論、人間に近いがまったくかけ離れている存在も居る。この物語は、その異界『トルソード』から、とある６つのアイテムがこちらの世界に送られた事により始まる。

＊

とある町バトスピセンターに―バトスピセンターとは、バトルスピリッツ専門店のカードセンターである―入る２つの人影があった。少年と少女、どちらも見た目は中学生くらいの年齢だ。自動ドアのセンサーが二人を認識すると、ウィーンという音を出してドアがあ

いた。ドアが開くと活気のある声や、店内のＢＧＭが聞こえてくる。二人はバトスピセンターの中に入ると、カウンターに立っていた馴染みの店員に軽い挨拶をして、空いているテーブルを探した。今回の目的は少女の方のカード入手だが、ここに来る途中で付き添いの少年が少しバトルをしようと提案し、彼女も了解した。やはりカードセンターなので、販売だけではなく他の客や友人と対戦ができるようにテーブルが設置されている。奥に設置されているテーブルが一つ、空いていた。二人はテーブルの上に自分のデッキケースを置き、椅子に座る。

「そういえばお兄ちゃん、デッキをちょっと改造したって言ってたけど、バースト入れる気になったの？」

「ん～…、バーストってなんか合わないんだよな。そりゃ、いい効果はあるけど…というわけで、効果の良さに負けて数枚入れました」

「結局かい」

会話でお気づきになると思うが、この二人は兄妹である。少年は兄の清水カイ、中学二年生だ。少女は１つ違いの妹、中学一年生の清水クウ。簡単な雑談をした後、自身でデッキをシャッフル、そして互いのデッキを交換してシャッフルした。デッキを持ち主に返して、テーブルにしかれているプレイシートの右上に置いた。そしてボイドと呼ばれる場所から、透明色の青色の物体、コアをプレイシートの左側辺りに、ライフとして五つ。その下の使用できるコアを置くスペース、リザーブに四つ置いた。更にそれぞれデッキの上から四枚、手札として引いた。

「じゃんけん…」

「ぽんっ！」

先攻と後攻を選ぶ権利を決めるじゃんけん。カイはグー、クウはパー。

「じゃ、私が先攻～」

「お前、バースト出てから先攻ばっかな」

クウがへへっと笑った。バーストの登場により、バーストを使うカードバトラーは先攻を選ぶ事が多くなった。いよいよ、バトルスピリッツが始まる。

第1ターン。バトルスピリッツのターンは複数のステップが存在する。

「スタートステップ。ドローステップ」

ドローステップにより、クウの手札が一枚増える。リザーブのコアを増やすコアステップや、スピリットの回復や使用したコアをリザーブに戻すリフレッシュステップも存在するが、第1ターン目には存在しない。そしてスピリット召喚、マジック使用、コアの移動をできるメインステップを迎えた。

「メインステップ！　ノックンモール2体を、共にレベル1で召喚！」

コアを1つ、右側の一番下にあるスペース、コアトラッシュに置いて、ファンシーなモグラが描かれたカードを場に出した。一枚目のノックンモールの上にコアを一個置き、もう一枚のノックンモールを軽減コストによりノーコストで召喚。同様にコアを置いた。

「ターンエンド」

第1ターンはスピリットによるアタックが出来ないので、これでエンドステップ、ターンの終了である。

「スタートステップ！」

続いてカイのターン。コアステップで自分のコアを1つ増やし、ドローステップで手札を増やした。

「メインステップ、フォボス・ドラグーンをレベル1で召喚。さらにバーストセットっと」

「あれ、珍しいね赤のカードって。今まで青一筋だったのに」

「ちょっとなー」

カイの場に刺々しい姿の翼竜のスピリットと、ライフの上に場所に裏向きにカードが置かれた。バーストセットにはコアは必要ない。

「んで、アタックステップ。フォボス・ドラグーンでアタック、そしてコイツは【激突】持ちだ」

「げっ…」

【激突】とは、『このスピリットのアタック時』に発動する効果で、相手は可能ならば必ずブロックしなければいけない。カイがフォボス・ドラグーンを横向きに、疲労させたのでアタックした事になる。

必ずブロックしなければいけないので、クウは渋い顔をしながらノックンモールの一体を疲労、攻撃をブロックした。フォボス・ドラグーンのＢＰは３０００、ノックンモールはＢＰ１０００。ＢＰはフォボス・ドラグーンの方が高いので、ノックンモールが破壊される。カードはトラッシュに置かれ、乗っていたコアはリザーブに戻された。

「ターンエンド」

「しょっぱなから激突って辛いなぁ…スタートステップ」

ドローステップとコアステップを経過させ、先ほどは無かったリフレッシュステップ。回復させるスピリットはいないので、トラッシュからコアをリザーブに戻すだけだ。

「メインステップ、オリンピアの天使ベトールを召喚」

今度は分厚い本を持った青い長髪の少女のカードだ。クウが使う黄色い縁のカード、黄属性のカードはファンシーな動物や、？萌え？系の様なカードが多い。

「アタックステップ、ノックンモールとベトールでアタック」

フォボス・ドラグーンは疲労しているのでカイの場に、ライフを護ってくれるスピリットはいない。

「ライフで受ける」

スピリット2体の攻撃で、カイのライフが二個減る。ライフはそのままリザーブに移動した。

「ライフ減少によりバースト発動。覇王爆炎撃」

先ほどセットしていたバーストを表にして、交換発動を宣言した。バーストは発動条件が揃えば、ノーコストでフラッシュ効果が使用できる。さらにコストを払いメイン効果も使用できるが、今回は使わない。覇王爆炎撃のバースト発動条件は、自分のライフ減少後。そして効果はＢＰ４０００以下の相手スピリット３体を破壊する。ノックンモールはＢＰ１０００、そしてベトールはレベル１なのでＢＰ３０００。つまり、クウの場のスピリットは全て破壊される。

「あぁっ！　最初のアタックで発動しなかったから、油断したっ！」

「残念でした。コアが欲しいから全部受けたんだよ。」

カイのイタズラを成功させた子供の様な笑みを見て、肩をガックリ落とした。もう何も出来ないので、渋々ターンエンド。カイのターン。引いたカードを見て、カイがニヤリとした。

「メインステップ、海賊ラッコルセア、レチクル・アームズを召喚。レチクル・アームズの召喚時効果だ、デッキの上から三枚破棄」

クウはデッキの上から三枚をトラッシュに破棄した。クウは嫌な予感がしていた。レチクル・アームズはカイの戦略を広げる、重要な名脇役。そして先程のカイの表情、嫌な予感しかしない。

「そしてレチクル・アームズをフォボス・ドラグーンに合体　（ブレイヴ）　。更にフォボス・ドラグーンにコアを追加してレベル２にアップ」

合体　（ブレイヴ）　を宣言し、フォボス・ドラグーンの上にレチクル・アームズを重ねた。これでフォボス・ドラグーンのＢＰは２０００アップし、ある効果が追加された。

「アタックステップだ。合体スピリットで、合体アタック！　合体スピリットの合体アタック時効果、【粉砕】！」

【粉砕】は、相手のデッキを上から、このスピリットのレベルと同じ枚数破棄する効果だ。合体スピリットのレベルは現在２。上から二枚破棄。破棄された中に、スピリットカードが一枚あった。カイはまたニヤリとする、いい感じだ。

「【粉砕】の効果でお前のトラッシュにスピリットカードが一枚以上トラッシュに置かれたから、ラッコルセアの効果発動だ。ボイドからコア一個を合体スピリットの上に置く。そのおかげで合体スピリットはレベル３にアップだ」

効果があらかた発動したので、本命のアタックだ。しかしクウが口を開いた。

「うっわ最悪…だけどこっちも効果発動！　さっきトラッシュにいったカードは執事ペンタン！　デッキから破棄されたこのスピリットカードは、ノーコストで召喚できる！　執事ペンタンを召喚！」

「だけど【激突】でもあるんだなぁ、これが」

「ぶつかったぁぁ！」

哀れペンタン。効果発動で場に出て早くも退場とは。ＢＰは合体スピリットの方が圧倒的に高いので、必ずブロックで破壊される。

「うぅ…執事ペンタンの効果、ペンタンが破壊されたので一枚ドロー」

「ターンエンド」

ライフはクウの方が多いが、流れはカイにある。苦々しい表情を続けているところ、どうやら手札にあまりいいカードがそろっていないようだ。ドローステップを終えても表情は暗い。

「星宿の障壁をレベル2で配置…ターンエンド」

クウはネクサスを配置しただけでターンを終了した。

「おいおい、テンション下がり過ぎだろ」

「うるさいなあ、早くやっちゃってよ！」

ハイハイ、と軽口で返してステップを経過させメインステップ。

「崩壊する戦線を配置して、アタックステップ！　合体アタックと同時に、【粉砕】。崩壊する戦線の効果で破棄する枚数＋2」

計五枚破棄。五枚も破棄されれば、マジックデッキでなければ、スピリットカードは一枚以上は高確率で破棄される。そうしたらまたラッコルセアの効果発動。ラッコルセアにコアが追加された。クウの場にあるのはネクサスだけ、彼女を守るスピリットはいない。ここで初めてライフが削られた。カイがターンエンドを宣言した。

「メインステップ！　星宿の障壁のレベルをダウン。皇子ペンタン

を召喚。効果発動。手札にあるカード名に『ペンタン』と入っているスピリットカードを一枚、ノーコストで召喚できる。執事ペンタンを召喚。ターンエンド」

アタックはしない。下手にアタックしたら攻め込まれる。大丈夫だ、ペンタンがいれば手札マジックを使って守りきれると、自分に言い聞かせた。カイがターンを初め、ドロー、コア、リフレッシュを終えた。

「うっし、これで多分俺の勝ちだ！　強暴竜ディラノ・レックスをレベル３で召喚！　不足コストは合体スピリットから使う。さらにレチクル・アームズを分離してディラノ・レックスに合体！　それによりディラノ・レックスはフラッシュ【超覚醒】を得た！」

【超覚醒】とは、自分のスピリット上から、コアを好きなだけこのスピリット上に置くことができる。この効果でコア１個以上を置かれるたび、このスピリットは回復するという効果である。

「アタックステップ。合体スピリットで合体アタック。効果【粉砕】」

クゥのデッキがまた五枚破棄された。ラッコルセアの効果で、ラッコルセア自体にコアが追加された。

「フラッシュタイミング！　アルターミラージュ！」

効果説明。黄色マジック、アルターミラージュ。このターンの間、コスト３以上の自分のスピリットすべては、ＢＰを比べ相手のスピリットに破壊されたとき、回復状態で自分のフィールドに残る。ただしこの効果は、『自分のターン』で使えない。クウの場には皇子

ペンタン　（コスト４）　、執事ペンタン　（コスト３）　がいる。アルターミラージュの効果で、ＢＰ勝負で破壊されることはない。だが、カイのほうが一枚上手だった。

「こっちもフラッシュ。【超覚醒】、コアはラッコルセアから１個、合体スピリットに乗せ回復する」

「本命アタックは皇子ペンタンでブロック！　アルターミラージュのおかげで、ペンタンは回復状態で場に残る……あれっ？」

どうやらクウは気付いたらしい。カイのコンボに。合体したディラノ・レックスの【超覚醒】と、レチクル・アームズの与える【粉砕】、ラッコルセアの効果で生まれるコンボ。【超覚醒】はコアの消費が激しい上、コアを取り除くことができない。しかし【粉砕】をディラノ・レックスに与えることで、ラッコルセアの効果でボイドからコアを補充できる。一回のアタックでコア１個消費と同時に、コア１個補充。マジックで妨害されたり、効果不発、ＢＰ負け、ブレイヴ除去されないかぎり事実上、無限アタック。リスクも多いが、決まれば恐ろしい事になる。ライフを削るのをできなくとも、【粉砕】のおかげでデッキを削れる。手札が悪いクウはもう、ブロックせずにライフで受けて負けるか、デッキアウトで負けるか、どちらかを決める事しかできない。

＊

勝敗は当然カイが勝利。クウの敗け方は、ライフがゼロになったから。彼女のライフは、愛するペンタン達やその他のカードと共に散った。アルターミラージュの効果で破壊されなくなったペンタンが

いたが、結局はデッキが無くなってジ・エンド。潔くライフで受けた方がいいと判断した様だ。ライフが無くなった時のクウのデッキは、みるも無残な枚数であった。この後も数回バトルしたが、勝率はカイの方が上だった。バトルが終わった後、クウが本来の目的であるカード入手するため、バトスピターに向かった。バトスピターはバトルスピリッツ専用のカード販売機、『ガチャガチャ』である。一回百円で４枚のカードが手に入る。カードパック１パック買うより、バトスピターを二回した方が金銭的に得をするので、クウは主にバトスピターをしていた。バトスピターを数回した彼女の表情は明るかったので、いいカードが当たった様だ。ここでカイがある事を思い出した。

「……あっ。っべぇ、あと少しでドラマの再放送の時間じゃねーか！　おい、俺ダッシュで帰るけどお前どーする！？」

「んあ？　新しくゲットしたカードためしに使いたいから、もうちょっといるー」

「わかった！　じゃ、さき帰るワ！」

カイの行動は速く、じゃ、と言いながら入り口に向かっていた。自動ドアが完全に開く前に出ようとして、躰を少しぶつけた。ぶつけた所が痛むだろうに、気にせずに走っていった。それほどドラマがみたいのだろうか。

「あ～ららぁ……」

クウが出した感情があまり籠もっていない声は、兄を心配しているものなのか、それともドジを揶揄するものなのか。そんなことよりもクウが考えているのは、どのカードを抜くかや、新しいカードを

入れてデッキバランスがどうなるか、これにつきた。

＊

ドラマが始まる4分前に、カイは自宅に到着した。玄関を勢い良く開けて、靴を脱いで自室に向おうとしてしたら何かを蹴った。それは小包だった。差出人は明記されていない、受取人は清水カイ。何故ここに置いてあるのか、それに心当たりもないが、自分に送られてきた物なのだから、もらっておこうと回収して部屋に向かった。ドアを開き、広くも狭くもない部屋に入った。デッキから抜いたカードや、入れようか迷っていたカードが散乱しているベットに小包を放り投げ、テレビの電源を入れた。起動音がブゥンとなり、暗転していた画面に電波受信された絵が映し出された。間もなくしてお目当ての再放送のドラマが始まった。間に合ったことに安堵して、ゆっくりとベットに腰掛けた。アバンが終了してＣＭになると、散乱した約二十枚のカードが気になったので整理していると、小包が視界に入った。誰から贈られたものなのかよりも、中身がなんなのか興味をそそられて梱包紙をビリビリと破る。中身は、バトルスピリッツファンならなかなか嬉しい物であった。青のシンボルを模した石がついたネックレス。

「おぉ～…」

石はなかなかに高クオリティ。青属性をメインに使うカイの胸が高鳴る。細部まで掘り困れた青属性のシンボルを見ていると、これをつけてみたくなってきた。自分にこういう類いは似合わないと思うが、この部屋に自分以外の人間はいない。思い切ってつけてみた。カイの胸の辺りで、青のシンボルがキラリと光る。カイは満たされ

る満足感の中、ある違和感を迎えることになる。

「ん……あれっ…」

満足感の次に顔を出したのは、授業中に現われると非常に厄介な存在、睡魔。しかもあらがえる事ができないくらい強い。鉛の如く重い瞼を必死に開けようと踏張ったが、結局負けてしまいベットに身を投げた。最後に視界に入ったのは、整理したカードと、その近くに置いておいたカードケースであった。

＊

予兆は無しに意識が覚醒した。砂ぼこりを含んだ風で軽くむせた。ふと感じた違和感にぼんやりとしていた意識が一気に覚醒する。

?なぜ今、自分は砂ぼこりを含んだ風を受けた??

自分が睡魔に負けたのは覚えている。だが自分は自室にいた筈だ。ガバッと上半身を起き上がらせ、状況確認しようとしたが視界に広がった世界に唖然とした。ずっと広がる荒野。テレビでしか見たことがない死んだ地に、今自分はいる。なぜ!?　理解不能の状況で自分の状態を確認する。眠る前に着ていた服、青のシンボルのネックレス、そして自分のまわりに散らばるカードと、カードケース。カードはカイのものだった。それに気付くと急いで回収する。

「どこ…ここ…」

やっと絞りだした声は、テレビやマンガで使い古された様なセリフ

にしかならなかった。ふらふらと立ち上がり、また呆然とした。自分が住んでいた地域では絶対に見えない光景。呆然しないワケがない、唖然としないわけがない。中学二年のガキの許容量　（キャパシティ）　で足りるわけがないのだ。なんなら、頭から煙が出るような真似をしてもいい。そんな時、地獄に仏の様な存在が現れた。馬が駆ける音。反応して振り返れば、こっちに向かって人がまたがった馬が走ってきていた。カイが、助かった！　、と内心で叫んだ。今の状況をどうにかできるかもしれないという、希望に歓喜した。馬がカイの近くに止まる。カイは駆け寄った。乗り手はフード付きのマントを身につけており、男か女かはよくわからない。

「あの！　……あ…えっと……あの！？」

聞きたい事があり過ぎて、上手く文章にならない。あり得ないくらいテンパっているカイを、馬に跨る人物は手で、黙れ、と指示した。相手の機嫌を損ねたら大変なので、素直に従った。カイを品定めするが如く、なめるように躰全体を舐めるように眺める。

「あの…」

「五月蝿い」

今度は声で黙らされた。声は高いので、もしかしたら女性だろうか？　どっちにしろこの状況がどうにかなればそれでいい。今はこの人物がカイにとって、蛛の糸を垂らしてくれる釈迦かもしれないのだ。

「うん。取り敢えずお前、身ぐるみ全部よこせやっ！」

お釈迦様から、脅迫されました。カイの予想を、チョモランマを越

えるほど上回った。

『Ｎｏ．１強暴竜ディラノ・レックス。粉砕×激突そして超覚醒！』（後書き）

『強暴竜ディラノ・レックス』
：コスト５・軽減コスト３　（赤）
：レベル１ＢＰ３０００・レベル２ＢＰ６０００・レベル３ＢＰ７０００：レベル１・２・３／【超覚醒】を持つ自分の合体スピリットすべては分離できず、お互い、その上のコアは取り除くことができない。【合体時】レベル３／系統：「地竜」を持つ自分の合体スピリット全てに？フラッシュ【超覚醒】自分のスピリット上から、コアを好きなだけこのスピリット上に置くことができる。この効果でコア１個以上を置かれるたび、このスピリットは回復する？という効果を与える。

仮面３はこのスピリットの第一印象に、ゴジラと似てるなぁ～、と思いました。

では、次回も行くぜ！　ギャラクシーステップ！！

Ｎｏ．２幻双龍シェイロン。？月姫？のクレア（前書き）

ども、最近友人の白デッキにフルボッコされた仮面３です。重装甲で私のアタック時効果がぁぁぁ…。

さて今回もバトルの内容のレベルが低いですが、これが私の限界です。お手数ですがアドバイスを宜しく御願いします。

No．2幻双龍シェイロン。？月姫？のクレア

いきなりの脅迫に、カイの頭は一瞬で真っ白になり、次にはクエスチョンマークが乱舞し、最終的に状況とマントの人物にツッコミを入れた。

「いや嫌だよ！　つーか無理だよ！！」

まあ当然のリアクションである。逆にオーケーと言える人物がいたら、是非とも拝見したいものだ。

「オメーに拒否権はねーよ」

「そんなぁっ！！」

「さっきからキンキンと……」

声にトゲがあり、少々の怒気を感じる。馬の乗り手は荒々しくマントのフードを剥ぎ取った。吊り上がった鋭い眼が、カイを睨み付ける。

「いい加減ウゼーわ」

フードを取った事により、男女の不明確だったイメージが完全になった。馬の乗り手の現在の呼び方は彼女に変わった。顔は思ったよりも女らしく整っているが、吊り上がった鋭い眼でキツい印象を受けてしまう。長めの黒髪をポニーテールの様に結ってなびかせている。

「……！？」

だがカイが目を奪われたのは、彼女の顔ではなかった。彼女の、本来ならば耳がある部分に目を奪われた。耳がないわけではない、確かにあるのだが、その耳の形が問題であった。

「み…耳！　耳がっ！」

「ん？　耳がどした」

彼女は、耳が長かった。よくマンガで見るような、エルフの様な耳。もっといえばバトルスピリッツのアニメに登場した、『月光のバローネ』の様な耳であった。カイが住む世界の現実では、まずあり得ない。彼女はカイの視線がうざったいと言わんばかりに、己の耳を擦った。

「耳ぐらいで騒いでんじゃねーよ……ん？　お前もしかして此界人（しかいじん）　か？　服もここらじゃあんま見ないし」

「此界人……？」

ここで彼女は、フードを取った事で視界が良くなったおかげで、カイがバトルスピリッツのカードを持っていることに気付いた。すると何かを思いついたのか、怪しく笑みを浮かべる。彼女は馬から降りて、カイと対峙した。彼女の方が身長が高く、カイは鋭い目付きで見下ろされてたじろいだ。

「ようこそ。異界『トルソード』へ。この世界はどんな奴でも歓迎するぜ、ガキ。まあオメーみたいな奴は大抵、最初帰りたいっていうけどな」

異界。その言葉がカイの頭で反復する。異界とは、『グラン・ロロ』と似た所なのだろうか。いやそれよりもまず、この少年激覇の様な展開は……。自分が今、どれほど逸脱した非現実的状況に置かれているのか、理解したカイは込み上げる感情をおさえきれなくなり、言葉として天空に解き放った。

「まぁぁじかぁぁあああああああああ！！！！！？」

大音量のカイの声を、天は受け止めてくれたが、周りの者には迷惑にしかならない。彼女は指で耳栓をし、いきなりの大きい音に驚いた愛馬を宥めている。

「うっせー。黙れ」

彼女自身もイラついたのか、わめけ続けていたカイの脳天を殴って黙らせた。

「あだぁっ！！　って黙ってられるわけないじゃん！　目が覚めたら異世界って、どんな超展開！？　これ無事に帰れんのかぁ！？　今月には新弾でんのに！！　大粉砕楽しみにしてたのにぃ！！」

彼女の拳骨で痛む頭を無視して、叫び続けた。帰りたい理由も幼稚そのものだが、その気持ちは本物意外の何物でもない。今は混乱していると考えよう。無様に咆哮する少年を見兼ねた彼女は、一言、声をだした。

「もし帰れるかもしれないヒントを、オレが知ってたらどうする？」

「……え？」

「もしオレがヒントを知ってたら、聞きたいか？」
勿論、当たり前だ。願ってもない申し出に、カイはイエスで返事をしようとした。
「けど、簡単に教えられねーな」
が、彼女自身が返答時間を終わらせてしまった。
「な、なんでだよ！？　教えてくれるって…」
「聞きたいかといったが、教えるとはいってねーよ」
「もうわけわかんねーよこのオレ女ァ！！」
まるでムキーッ、という言葉がカイの頭に浮かんでるかの様な騒ぎ方だ。
「まー落ち着けって。？コイツ？でバトルしよう。コイツで勝ったら、情報をくれてやる」
そう言って彼女が出したのは、バトルスピリッツのデッキであった。カイは何故このタイミングでバトルスピリッツなのか、少々理解に苦しんだ。
「この世界では、基本的に武力行使よりもバトルスピリッツが優先される。バトルスピリッツは至高の決闘だからな」
なるほど。どうやらルールはグラン・ロロと似たり寄ったりらしい。だがある意味幸いだ。自分では無理な要求されるよりはマシである。

カイは威圧に負けないように、できるだけ眼をキリッとさせデッキを構えた。

「そのバトル、受けて立つ！」

「よしっ！　それでこそ男だ。じゃあオレは情報を、お前はお前の持っている全カードを賭けてバトルだ！」

「いや最後の賭けって聞いてないんだけど！　なにそ」

「ゲートオープン！　界放！！」

「オィイ゛ィィィ！！」

シャウトした瞬間、カイの視界は白に包まれた。

＊

視界が正常に戻ると、そこには何度も憧れた、アニメーションの世界でスピリットとカードバトラーが闘っていた？闘技場　（バトルフィールド）　？が広がっていた。広い、とても広いスピリット達の闘う土と岩石で作られたバトルフィールドの端に、正面を向かい合うようにプレイシートの役割を持つ台座が設置されている。その内の１つの、カードバトラーが立つべき場所にカイが立っていた。

「うぉぉぉ……！」

ため息に近い、感嘆な声を漏らしたカイ。その声はバトルフィール

ドに立った感動を表したものであり、己の今の姿を喜び、漏らしたものであった。属に言うそれは、バトルフォーム。馬神　弾やバローネ、陽昇　ハジメその他が身につけている物と似たような物だ。ゴツゴツとした印象の胴鎧には、５つのライフが簡単に何かの星座を描いている。両肩のアーマーの付け根の辺りには、天秤に青のシンボルが乗った様な絵が書かれていた。そして青のシンボルのペンダント。恐らくこのバトルフォームは、カイの？キースピリット？を模しているのだろう。

「スッゲ！　アニメみてぇだ！」

「ハハッ、気に入ったみたいで何よりだ」

離れた場所にいた彼女が声を発した。遠くいるのに声が近くから聞こえたのは、バトルフィールドの力だろうか。彼女もバトルフォームを装着しており、マントを脱いでいた。彼女のは白を基調としており、どこか龍を思わせる。背には機械的な小さい双翼が生えていた。マントに隠れていたのか、彼女の腰の辺りから細い尻尾が生えている。またもカイの視線に気付いたのか、尻尾を振ってみせた。

「そか、此界には魔族がいないんだよな」

魔族。バドルスピリッツのアニメでも登場した、人間とは違う進化を遂げた生物。人間に近い姿を持つ者から、かけ離れた形状の持つ者もいる。

「オレも？一応？魔族でな。まあそんなことより、今はバトルだ」

「あっそうだ！　さっきのなに！？　俺がカードを賭けるって！」

負けたら情報なし。さらにカードも奪われる。カイの方がリスクが高すぎる。

「あーもういちいちウゼーな。そこ思い出すなよ……メンドイなあもう」

「メンドイで片付けんなよ！　こっちには大問題ですよコンチキショー！」

「うっさいな……今はカードが必要なんだよ…」

「はいぃ！？　最後ほうよく聞こえなかったんですが！！」

彼女の消え入りそうな声で、重要な部分が聞こえなかった事に苛立った。だが彼女が簡単にあしらう。

「ギャーギャーうっせんだよ！　さっさとすんぞ！　先攻はくれてやるっ！」

噛み付きそうな勢いで言い返され、カイは簡単に気圧されてしまった。カイもまだ中学生のガキ、まだまだ弱い所がある。渋々したがい、既に設置されていた自分のデッキからカードを4枚引く。彼女も同じように引いた。第1ターン、カイのメインステップ。

「柱岩の海上都市をレベル2で配置」

リザーブからコアを支払いネクサスを配置すると、カイの背後に巨大な縦長の岩で作られた建物が数本、現れた。驚きはしたが、だいたい予想はしていたのでリアクションをする程ではなかった。だが感動はしたのでパアッと表情を明るく輝かせた。

「そしてバーストセットをし、ターンエンド」

第2ターン。彼女はコアと手札を補充し、メインステップに突入した。

「シキツルを召喚！」

ネクサスとは違う現象がフィールドに起こる。紫のシンボルがフィールドに出現し、それが砕けると中心からおどろおどれしい紫の体色をした鶴が現れた。

「シキツルの召喚時効果でデッキから一枚ドロー。さらにカッチュウムシを召喚！」

今度は緑のシンボルが現れ、兜が昆虫になったようなスピリットがフィールドに出た。

「緑と紫の混色デッキ…？」

「ターンエンドだ」

彼女はフィールドにスピリットだけを並べ、アタックせずにターンを終了した。

「柱岩の海上都市をレベルダウン。今度は焔竜の城塞都市を配置！
ターンエンド」

「なんだあ？　ネクサスばっかで、手札事故かよ」

「そんなんじゃねぇよ。アンタのターンだ。早くしろい」

バトルにあまり動きがないまま、第4ターン。バトルはここから動き出す。

「メインステップ！　ストロゥ・パペットを召喚。そしてストロゥ・パペットから全てのコアを外してヤン・オーガをレベル2で召喚！　アタックステップ！」

初めてのアタックステップ。心なしかスピリット達も、闘志を燃え上がらせてか咆哮を上げた。

「シキツルでアタック！」

甲高い声を上げて、シキツルはカイ目がけて飛翔する。薄い翼をはためかせて接近し、ほぼ体当たりに近い攻撃方でライフを狙う。シキツルの攻撃が直撃する寸前、光の膜がカイを包んだ。膜はカイを守ったが、砕け散りライフは削られてバトルフォームの青い光が1つ失われる。それだけではない。痛みと衝撃もカイに伝わり、後方へぶっ飛んだ。

「……イッデェ！　予想よりかなりいてぇ！」

悲痛な叫びを上げながら、立ち上がる。痛みは辛いが、カイにはやることがある。

「ぐっ……ライフ減少によりバースト発動！」

セットしていたバーストカードが跳ね上がり、カイの手に納まった。

「マジック、烈光閃刃！」

カイの後方に炎が燃え盛り、達筆な文字で烈光閃刃と描かれる。烈光閃刃、効果はＢＰ３０００以下のスピリット全てを破壊する。シキツルとカッチュウムシが炎に包まれて破壊される。

「ターンエンドだ」

「俺のターン！　タワー・ゴレムをレベル３で召喚！」

ここで、柱岩の海上都市レベル１の効果が発動。【粉砕】を持つタワー・ゴレムが召喚されたので、彼女のデッキを２枚破棄させた。続いてアタックステップに進んだ。

「タワー・ゴレムでアタック！　【粉砕】の効果で３枚破棄だ！」

「やはりデッキ破壊　（アウト）　狙いか。ライフだ」

彼女のデッキの上から３枚がトラッシュに置かれると、本命のアタックとしてタワー・ゴレムが突撃し、豪腕を振り上げ殴り付ける。光の膜とライフを砕く。

「……！」

慣れているのか、悲鳴らしい悲鳴は上げない。

「ターンエンド」

「タワー・ゴレム…厄介なスピリットだ。スタートステップ」

タワー・ゴレムは【粉砕】の他に、コスト5以下のスピリットを疲労状態でもブロックできる。小型スピリットを並べるタイプのカードバトラーには辛い効果を持つ。しかし彼女には対策があるのか、言葉にはあまり緊張がない。

「ヤン・オーガをレベル3にし、アナグマ・コスケを召喚。バーストセットし、ほらオメーのターンだ」

鎧の様な外皮を持つヤン・オーガと武者の様な低コストスピリット。ブロック勢としては心許ない。カイにとっては攻め時、これを有効に活用しないてはない。タワー・ゴレムを回復させてメインステップ。

「タワー・ゴレムをレベル1にダウン。柱岩の海上都市を再びレベル2に。そしてフォボス・ドラグーンをレベル3で召喚！　アタックステップ！　フォボス・ドラグーンでアタック！　こいつは【激突】持ちだ！」

クウのバトルの時活躍したフォボス・ドラグーンが、躰を得たことにより、更に頼もしく見える。系統に星竜とあるだけあって、それにふさわしい咆哮を上げて【激突】を繰り出す。さらに柱岩の海上都市の効果。彼女のデッキから1枚破棄。破棄されたカードはコスト1だったので、アナグマ・コスケを疲労。

「ヤン・オーガでブロック」

ヤン・オーガのBPは５０００、フォボス・ドラグーンは６０００。フォボス・ドラグーンが口から炎を漏らしながら突進する。その攻撃がヤン・オーガを捕らえようとした瞬間、彼女が手札からカードを1枚出した。

「フラッシュタイミング、マジック、ライフチャージを使用。対象はヤン・オーガ」

効果説明。緑のマジック、ライフチャージ。コスト3以上の自分のスピリット1体を破壊することで、ボイドからコア3個を自分のリザーブを置く。ライフチャージの効果によって、ヤン・オーガが消滅し、フォボス・ドラグーンの攻撃は空を切っただけで終わった。

「更にヤン・オーガレベル3破壊じ効果でリザーブにコアを3個置く。計6個だ」

「コアが貯まる前にデッキを削る！　タワー・ゴレム行け！　【粉砕】と柱岩の海上都市の効果で2枚破棄！」

「ライフだ」

仲間ができなかった仕事をこなす様に、タワー・ゴレムは腕を振るった。彼女のライフは残り3つ。その時、バーストが跳ね上がった。

「バースト発動！　冥皇封滅呪！」

冥皇封滅呪の文字が浮かび、紫光を纏った無数の札がフィールドを舞う。冥皇封滅呪のバースト効果は、疲労状態のコスト5以下の相手のスピリットを1体破壊する。

「フォボス・ドラグーンを破壊！」

札がフォボス・ドラグーンを取り囲んだ。フォボス・ドラグーンは逃げようと炎を吐き出したりしたが、呪の力を纏う札には意味をな

さない。幾つもの札がフォボス・ドラグーンを貫く。

「更にコストを支払い、フラッシュ効果。自分のスピリット1体を破壊する事で相手は、相手のスピリット1体を破壊する。アナグマ・コスケを破壊！」

「くっ…タワー・ゴレムを破壊」

今度札は標的をタワー・ゴレムに絞る。刃物より鋭くなっている札は、タワー・ゴレムの堅い躰をいともたやすく切り刻んだ。お互いのフィールドにスピリットはいない。カイはなにもできなくなったので、ターンエンドを宣言した。

「おいおい。スピリットがいなくなったぐらいで、そんなに落ち込むなよ」

「そんなじゃねえ！」

カイが暗い表情をした理由は、手札にある。彼女はわざとらしく肩をすくめて、カードを引いた。

「さあ、そろそろデカいのいくぜ！　不紫鳥フォグニクス、レベル3で召喚！」

不紫鳥フォグニクス、Mレアのカードを迎えるフィールドは今までとは違うエフェクトを魅せた。紫のシンボルが砕けた瞬間、闇色の雲が天から舞い降りる。見ていると気分を悪くするような雲は、巨大な翼の羽ばたきで晴れる。現れたのは炎を纏う不死鳥ではなく、恐ろしい模様を持つ不紫鳥であった。

「やっぱMレアクラスになると迫力がスゲェな…」

「フォグニクスの召喚時効果、自分はデッキから、このスピリットのレベルと同じ枚数ドローする！　よって3枚ドロー！　そしてシキツルを召喚、1枚ドローだ！　アタックステップ、フォグニクスとシキツルでアタック！」

「ライフで受ける！」

不気味な2体の怪鳥が襲い掛かる。シキツルは痛みこそはそれほどではないが、フォグニクスには迫力があり、より恐怖感を煽られた。痛みも倍に感じる。

「ぐぁっ！！」

「ターンエンド。ほれ頑張れ頑張れ」

「クソッ、馬鹿にしやがって…」

カイの残りのライフは2。フィールドにスピリットはゼロ。戦局は悪い。

「ネクサス、崩壊する戦線と俊星流れるコロッセオを配置。柱岩の海上都市をレベルダウンし、ロック・ゴレムレベル3、轟腕のトドン召喚！」

これで勝負を決める！　と心中で叫んだ。なぜなら、現在の手札ではそれが限界だからだ。最初に彼女に手札事故と言われた時、ドキリとした。図星だった。あの時から、手札にくるのはマジックとネクサスばかり。4体来たのは半ば奇跡だったと思う。

「ロック・ゴレムでアタック！　【粉砕】と崩壊する戦線の効果で、5枚破棄！　フラッシュタイミング、マジック、マーキュリーゴブレットを使用！」

効果説明。青のマジック、マーキュリーゴブレット。相手のフィールドで最もコストが低いスピリットを1体を破壊する。この場合、シキツルが破壊される。

「スピリットを破壊したので、焔竜の城塞都市の効果で1枚ドロー！」

「アタックはライフで受ける」

タワー・ゴレムよりも太い腕を振り下ろし、ロック・ゴレムがライフを砕いた。残りライフ2つ。

「トドンでアタック！　【強襲】の効果、柱岩の海上都市を疲労させてトドンを回復！」

【強襲】。簡単に説明すれば、ネクサスを疲労させれば指定された回数、スピリットが回復できる効果である。トドンは【強襲：1】なのでターン中1回まで回復できるのだ。

「そんでもって！　フラッシュ、マーキュリーゴブレット！　フォグニクスを破壊！」

「へぇ、もう一枚あったか。ライフで受けよう」

焔竜の城塞都市の効果でまた1枚ドロー。トドンが、碇を振り回してライフを砕く。残りライフ1つ。カイは小さくガッツポーズをした、これで勝てる！　口ではなく行動で表した。相手のフィールドに一枚もカードないので、俊星流れるコロッセオの効果で相手はマジックカードを使用できない。コアを外す事が得意な紫マジックで反撃を受ける事はない。手札にあるカードではこのままバトルを続けても勝てる自信はない。

「もう一度トドンでアタックだ！！」

勝利への一撃と信じて高らかに宣言した。トドンもそれに応えるように、碇の鎖を握り、豪快に振り回した。回転速度が増し、その威力を高める。回転が最高になると、そのゴツゴツとした碇を投げつけた。あとは直撃すれば、このバトルは勝ちだ。子供らしい歓喜の表情で、トドンの碇を眼で追った。

「勝てそうになって嬉しいのは分かるが、そのだらしねぇ顔はやめときな。ハイ残念、フラッシュタイミング、マッハジーを【神速】召喚」

【神速】。フラッシュタイミングで、手札にあるこのスピリットカードは、召喚コストの支払いと上に置くコアをリザーブから使用することで召喚できる。

「え……」

空っぽだった彼女のフィールドに、【神速】の代表的な昆虫スピリット、マッハジーが現れる。勿論マッハジーはトドンの攻撃をブロックして、消し飛んだ。

「ほらどうした。終わりか？」

頭が真っ白になりかけていたが、彼女の声でもとに戻るがいい気分ではない。焦りで喉が渇いて、上手く声がでない。

「た…ターンエンド」

この時、トドンの効果で【粉砕】を持つロック・ゴレムが回復した。だが相手の手札とコア、そして彼女の表情を見るかぎり安心できない。ライフの数は相手が少ない、だが彼女は余裕の表情でカイを見ている。それがなんとも言えない不安感をカイに与える。不安感から額にじんわりと汗をかく。

「さてメインステップ。ここで終わらせなきゃオレの負けだねぇ。負けるワケにはいかねえから、ドデカくいくぜ。オレの相棒を取り戻すために……」

また最後のほうが聞き取りにくかったが、緊張感に当てられていたカイの聴覚は鋭くなっており、なんとか認識した。

「相棒…？」

「双幻龍シェイロン、レベル2で召喚！！」

フィールドの天空に雲が立ち込めた。そして雲にぽっかりと穴が開き、月が小さく見えた。彼女はその月を見据えて、眼を細めた。

「月はあいつを思い出させる……だが、あれはあいつに遠く及ばない」

月にポツリと、黒い点が現れた。点は徐々に大きくなり形が分かってくる。雲の穴を潜り抜け、降臨したのは双頭の龍。長い躰をくねらせ、４つの瞳でシェイロンは、カイのスピリットを睨み付けた。

「シェイロンの召喚時効果、相手のスピリット全てのコアを、それぞれ１個になるように相手のリザーブに置く」

シェイロンが２つの頭から同時に、咆哮が上げられた。咆哮の衝撃がロック・ゴレムとトドンを貫くと、ロック・ゴレムからコアを奪い、レベルを１にダウンさせた。

「まだ終わりじゃねーぞ！　今度はこいつだ！　魔界七将デスペラード召喚！！！！」

今度現れたのは、ある意味紫のスピリットらしい気味の悪いモノだった。シンプルな悪魔の様な躰をして、顔の辺りには人間に近い顔が４つ浮かんでいる。両手にはそれぞれ、鍔のない剣のような者を握っている。

「デスペラード、召喚時効果、発動」

このスピリット以外のすべてのスピリット上から、コアを１個ずつ持ち主のリザーブに置く。　ボイドから、この効果で破壊されたスピリット１体につきコア１個をこのスピリット上に置く。この効果は自分にも適用され、シェイロンのコアが１個外されレベルダウンした。シェイロンはそれだけですんだが、ロック・ゴレムとトドンはそうはいかない。シェイロンの効果でロック・ゴレム達はコア１個しか乗っていない。つまりカイのスピリットのコアは０になり、レベル０として破壊される。

「ロック・ゴレム！　トドン！！」

代わりにデスペラードのコアが２つ増えた。

「さあ、終わらせよう。デスペラード、行けぇ！！」

魔界の将は主の命により、剣を構えた。滑らかな光を放つ二対の剣は、ネクサスしか配置されていないフィールドを通り越して、カイに向けられている。星が流れるコロッセオも、岩石でできている海上都市や城塞都市も、巨人が描かれているネクサスも、カイを守る力はない。デスペラードは一度、剣で空を切り裂いた後、カイ目がけて飛翔した。このまま攻撃を受けてしまえば、次のシェイロンの攻撃で負けてしまう。負けたらカードを奪われる、そんな事になってたまるかと言わんばかりに、手札のうち１枚を突き出した。焔竜の城塞都市の効果で、引いたカードのうちの１枚だ。

「フラッシュタイミング、絶甲氷盾！！」

効果説明。白のマジック、絶甲氷盾。フラッシュ効果はこのバトルが終了したとき、アタックステップを終了する。控えていたシェイロンの躰を氷が拘束した事により、アタック不能になる。

「チッ！　だがデスペラードの攻撃はどうする！」

「ライフだ！」

デスペラードが二本の剣を振り抜き、カイを守る光の膜をＸ字に切り裂いた。

「がぁぁっ！！」

追い込まれた状態での、Ｘレアの攻撃は格段に痛みを感じる。思わず片膝をついた。

「ターンエンド。虫の息、ってやつだな」

台座にあった取っ手を使って、立ち上がる。コアステップを経過して、ドローステップ。手札にはブレイヴカードのみ、ここでスピリットカードを引かなければ負けが確定してしまう。引けるのか？そんな考えしか頭に浮かばない。弱気になる。本来のバトルスピリッツなら、ここまで緊張しないだろう。だがこのバトルスピリッツには痛みがある。それに自分のカードがかかっているのだ。弱気になってしまう。だが引かなくても、負けるという道しかない。ならば引くしかない。奥歯を噛み締めて、デッキに手を掛けた。そうすると、ふと、頭の中にとあるスピリットの姿が浮かんだ。それはカイのデッキで、二番目に信頼しているスピリット。そのスピリットの姿浮かんだ途端、弱気な感情が吹き飛んだ。絶対的な安心感。カイの表情も和らいだ。

「……？」

「いくぞ…ドロー！」

勢いよく引いたカードを、天に掲げた。不思議と、絵柄を確認しなくともそのカードが分かった。

「大地を踏みならし、【粉砕】の力を秘めた双拳を振るえ！！　闘神の王、巨人王ランドルフ、召喚！！！！」

ロック・ゴレム達の物より一回り大きい青のシンボルが出現し砕け

た。大気が震え、王の降臨を示してフィールドに轟かせた。上空より屈強な肉体を持つスピリットが開いした。着地の衝撃で地面に罅が入る。白髭と白髪をなびかせる年老いた王だが、その躰は現役の戦士の風格そのもの。白いマントをはためかせ、フィールドに仁王立ちをした。

「ハッ！　いまさらそんなもん出したところで――」

「崩壊する戦線をレベル２にアップ。そして、ヴィクトリー・ホワイト・ドラゴンを召喚！！　ランドルフに合体　（ブレイヴ）　！！」

もしもの時にを想定して入れたブレイヴスピリット。まさか使うタイミングがくるとは。巨人王の背にＶの字に見えなくもない翼が、２つ装着された。

「っ！　そのブレイヴは！！」

「そうだ！　ヴィクトリー・ホワイト・ドラゴンの効果で、ランドルフは【重装甲赤／紫】を得た！　これで紫マジックはランドルフに聞かない！　アタックステップ、砕け！　合体スピリット！！」

ランドルフが己の拳骨を打ち鳴らして、地を強く蹴り付けて低空で飛行した。地面を蹴り付けた時、一撃の威力の高さで地面が捲れた。

「崩壊する戦線レベル２の効果でランドルフは最高レベルに。そして【粉砕】の枚数を＋２にするので、ランドルフの【粉砕】は５枚だ！」

ランドルフが拳から、青い波動を出して、彼女のデッキを５枚破棄

させた。そしてランドルフのもう一つの効果が発動する。レベル3、アタック時効果、相手のスピリット1体の上から、このスピリットの【粉砕】によって破棄されるカード1枚につき、コア1個を相手のリザーブに置く。指定したのは回復状態のシェイロン。シェイロンは全てのコアが外されたので、レベル0として破壊された。彼女を守るスピリットはもういない。

「いっけぇぇぇぇ！！」

右の拳から青い氣を放ち、構えた。彼女は自分の手札を見た。カウンターとして残していたマジックは、デッドリィバランスと、トライアングルトラップ。デッドリィバランスは重装甲を持つランドルフには効かない。トライアングルトラップはフィールドに、緑のシンボルがないので使用できない。彼女は軽く舌打ちした後、手札を下ろして瞳を閉じた。

「ライフで……受ける」

カイが今度こそ勝利を確信して拳を天に突き上げたと同時に、ランドルフが最後のコアを砕いた。

＊

「クソッタレ！！」

バトルフィールドから戻ってきたカイ達。彼女は負けたからなのか、苛々を発散させる様に地を蹴り付けた。

「なあ」

流石にこの状態の彼女に話し掛けるのは躊躇ったが、どうしても聞きたい事があった。

「……情報だろ。今教える」

「それもだけど、なんで俺のカードを取ろうとしたんだ？」

「答える理由はない」

「ここだとバトスピは至高の決闘なんだろ。じゃあ敗者は勝者に従ってよ」

このガキ、意外と頭使えるのか。と、内心で毒づいた。渋々答える事になった事にまた苛ついた。

「……オレの今使ってるデッキは、本来のデッキじゃねえ。オレのメインのデッキは、ある盗賊団に奪われた。その盗賊団とはちょっとゴタゴタがあってよ、その腹いせだろ。カードバトルなら負けないが、大人数で不意討ち、しかも武力できやがった。たいした抵抗もできずにデッキをぱくられた。奴らもカードバトラー。カードバトルを申し込めば断れないだろうと考えた。デッキを取り戻そうとカードを集めようとしたけど、時間がかかる。スペアのカードでデッキを組んだが、これじゃあ盗賊団の大将のデッキと相性が悪い。どうしようかと思ってところにお前を見かけたから、カードを奪おうと…」

それから彼女は黙った。カイとは目を合わせづらいのか、顔をそらしている。カイは何かを考えた後、口を開いた。

「なあ、もう1ついいかな？」

「今度はなんっだよ！」

また何か言い付ける気か、と。

「アンタのデッキを取り戻すの、手伝わせてくれないか？」

「……ハァ？　ガキが何言って…」

「俺はガキだけど、ここならバトスピでなんとかなりそうだから、俺も手伝えるだろ」

「オメー、帰りたくないのかよ？」

「帰りたいけど、カードバトラーとしてアンタをほっとくことはできない。それに情報だけもらっても、ナビゲーターがいなきゃ意味無いだろ？　デッキ取り返すの手伝うから、成功したら俺が元の世界に帰るの、手伝ってくれよ。な、頼む！」

一瞬、彼女はポカーンとした表情になった。なんだ、こいつ。そう言いたげにも見える。表情を元に戻すと、考えを巡らせた。利用できるなら、利用しよう。ダメだったらまた他の手を考えればいい。これは期待という賭けだ。

「……わかった」

「よし！　交渉成立！　よろしく…えっと…」

そういえばまだ、名前を聞いてなかった。そしてまだ名乗っていない。

「俺は清水カイ。アンタは？」

そういって手を差し出す。

「クレア。クレアだ。短い間だと思うが、よろしく」

少し距離を置いた言葉を放って、握手をした。

「おいおいそんなことゆーなよ…」

「ほら、決まったならさっさと行くぞ。奴らのアジトへ」

彼女ことクレアは、マントを羽織りなおすと愛馬に跨って歩かせた。

「ちょっとちょっとぉ！？　俺は！？」

「しらね。歩け」

「乗せてよお馬さんに！」

「バサシはオレしかのせねえ」

「それ名前！？」

こうして清水カイの、長くなるのか、短く終わるのかまだわからない異界での冒険が始まったのだった。

No．2幻双龍シェイロン。？月姫？のクレア（後書き）

『双幻龍シェイロン』
：コスト7・軽減3　（紫）：レベル1・5000　（1）　レベル2・9000　（4）
：レベル1・レベル2『このスピリットの召喚時』相手のスピリットすべてのコアを、それぞれ1個だけになるように相手のリザーブに置く。／レベル2『自分のバースト発動後』相手のスピリット2体のコアを、それぞれ1個ずつになるように相手のリザーブに置く。

はい、今回登場した女盗賊のクレア。分かる人もいたと思いますが、バローネがモチーフです。バローネ様が結構好きな仮面3。喋り方が全然違うけどね！　バローネをモチーフとしていて、サブタイトルの二つ名を見れば彼女が使う本来のデッキもだいたい分かるかと思います。因みにクレアが今回使ったコンボは、あるバトスピマンガで紹介されていたものをちょこっと改造したものです。

さていきなりアンケートが二つあります。

1、文章中でコアや手札の枚数を書くべきか。

2、不定期でもいいからこの作品を、続けていくか。

お手数ですが宜しく御願いします。

さて次回は、カイと盗賊団の団長とのバトル！　ついにでるか！？
　カイのキースピリット！　まあ予告を見てくださった方には分かるでしょうが。

次回も決めるぜ！　ギャラクシーステップ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6314y/

序章・バトルスピリッツ ―粉砕激打カイ―

2011年12月4日00時58分発行